

松山市所属 忽那諸島における

島嶼部博覧会

いわゆる『しまはく』の

開催についてを語る

● 島と聞いて、あなたは
何を思い浮かべますか？

島国日本。北海道、本州、四国、九州、沖縄本島、この5島が本土と呼ばれ、それに付随する有人島の数に261、さらに無人島を含めると実に6852の島によつて日本の領土は構成されている。この日本の領土はユーラシア大陸の極東の地であつたが、海洋プレートの圧力による大陸への付加と、その後の激しい地殻変動、また氷河期など極端な気候の変化による海水面移動の影響等で、やがて弧状列島の態を成し、その腹は太平洋に臨み、背には日本海を背負うといった現在の日本列島の姿に落ち着いたという。つまり、日本人はすべてが「しまびと」であるが、あえて私は本土以外に住む「しまびと」の話をしよう。



忽那水軍の出城跡には今は灯台が

那諸島のごくありふれた一日について語ってみよう。

● しまびとの暮らし

島の朝は早い。鶏に起こされるのでもないが、たいていのしまびとは、朝まだ日も昇らぬうちから起き出し身支度をすする。山に抱かれた中山間地域とは違い、

さて、その日本列島の滴ほどのエリア、私たちの暮らす忽那諸島は、瀬戸内海の西方に位置し、四国は愛媛その県都松山市に所属しているのだが、その海域は広島県と山口県、そして大分県にも隣接している。まずは、私たちが住まう忽

四方を海に囲まれ太陽の浮き沈みともにある私たちの暮らしは一日が長い。しまびとの生計は基幹産業である第一次産業に支えられている場合が多い。ただし、だれもが柑橘や野菜を作り、魚を獲っているわけではない。かくいう私も釣り餌のゴカイ養殖を本業としている。もちろん、みかんを育て、たまねぎも作り、時には釣りに出かけ、半農半漁の生活といったところか。そのような島での生活は自然の恩恵と、同時にその脅威にさらされている。自然は滋養であり毒でもある。燦爛と降り注ぐ太陽の光を海面が照り返し、山の斜面に生える柑橘



松山離島振興協会 会長
田中 政利
(松山市上怒和)



『しまはく』に先駆け開催した『松山しまサミット』

●『しまはく』を開催してみよう

をまんべんなく育てている。朝夕の寒暖の差と吹き渡る潮風とが、島のうまい柑橘の素である。一方でしまびとは、台風の猛威やそれに伴う塩害には昔から泣かされてきた。農業だけではない。係留した船舶や養殖設備はもとより、陸上養殖でのひらめ育成施設の壊滅や、浜辺の家や倉庫の損壊は、島に暮らす私たちにとって大いなる脅威だ。

しかし、私たちはそれでも島に住み続けていく。島が大好きだからだ。よく「なぜ」と聞かれる。「不便でしょう」と言われる。確かに昔は多少不便であった。でも今は物流が変わった。島に居ながらにして、北の大地の恵みや清流で実った米、南国のフルーツに六本木の流行りのスウィーツ、果ては海外のどんなものでも手に入る世の中になった。どう不便か。物欲という意味では十分に満たされる。ただ食べるものなどにはまったく困らないが、救急や消防となると地域的特性が大きな足かせとなる。

私の住む島は「怒和島」という。「ぬわじま」と発音するが、なかなかだれも読んでくれない。忽那諸島には、安居島（あいじま）、睦月島（むつきじま）、野忽那島（のぐつなじま）、中島（なかじま）、怒

和島、津和地島（つわじじま）、二神島（ふたがみじま）、興居島（ここしま）、釣島（つるしま）と9つの島があり、どれも一筋縄では読解できぬが、忽那諸島群でも一番読みづらい名前であろう。これら忽那諸島での博覧会開催の発案を聴き入れてくれた松山市長には大変感謝している。

時は平成17年、松山市は、お隣市の北条市、私たちの住む6つの島からなる中島町と2市1町の合併を試みた。それまで興居島、釣島の2島があるのみだったが、この合併で松山市は、旧北条市の安居島と旧中島町の6島を加えた忽那9島をその市域に組み入れることとなった。初めての本格的な離島振興の取り組み



上怒和の秋祭りに奉納される獅子舞

を余儀なくされた市長は、広く市民の提案を聴く事業「みんなのまつやま夢工房」で離島振興をテーマに取り上げた。それがそもそのスタートとなった。夢工房のメンバーが中心となり、私が会長を務める自主活動組織「松山離島振興協会」もできた。あれから

5年。今、松山市は、市長が10年来追いつめた政策「小説『坂の上の雲』を軸としたまちづくり」を推し進め、3年間のNHKスペシャルドラマの放映を追い風に、独自の観光客誘致策を展開している。そこに時期を合わせたかのように、私たちの提言事業『しまはく』も市長公約となり、その開催を目前にしている。

しまびとの元気を引き出すこと、そして子どもたちを生み育てられる環境を作ること、これが最も私が望む島の形である。この兆しがこの忽那諸島で見届けられるなら本望であり何も思い残すことはない。忽那諸島に訪れた千載一遇のチャンス『しまはく』に忽那諸島の再生を懸けている。生を受けたこの島で精一杯生き、しまびとの幸せのために走り続けるつもりだ。なぜなら、私自身が、なにより島を愛しているからである。

